

Special interview ～未来を担う、港北の星(慶應義塾高校体育会蹴球部)～



ラグビーワールドカップ2019™もプール戦がいよいよ決勝トーナメントを迎えます。ますますラグビー熱が加速する今、横浜のラグビーを盛り上げる方々にお話をうかがいました。

第2弾は慶應義塾高校体育会蹴球部の杉之原 晃生さん（左）と松岡 陽平さん（右）です。

—ラグビーを始めたのは、いつですか？きっかけは？

年少の時にラグビーを始めました。きっかけは、3つ上の兄がラグビーを始めたのがきっかけですね。兄と中学生になるまで地元の「田園ラグビースクール」に通っていました。（松岡）

僕は年中の時、幼稚園の授業で1度ラグビーをやったのが楽しくて。それがきっかけで地元（広島）のスクールに通い始めました。（杉之原）



—ラグビーの魅力とはどんなところですか？

いろいろありますが、他のスポーツとは違って「人との連動」が大事なスポーツだなと思います。自分が良いプレーをするのはもちろんですが、自分だけではなく、チーム全員がまとまって連動することによって結果が出せた時の達成感や喜びはラグビーの魅力だと思います。また、ポジションによって役割があるのも、面白いです。僕は監督に勧められ3年生の春からフルバックからセンターへとポジションを変えました。今はメンバーに指示を出すことが増え、難しいですが、やりがいを感じています。（松岡）

僕はスクラムを組んだ時のぶつかりあう「迫力」と、試合後に選手同士が敵・味方関係なく仲良くできるという「ノーサイド」の精神が好きです。広島で一緒にラグビーをしていた同級生が、いま神奈川の強豪チームにいますが、彼らは敵でもあり、良い仲間でもあると思っています。（杉之原）

—ラグビーを通じて学んだことはなんですか？

前で体を張るポジションにいて「チームのために犠牲になる」ということが学びになったなと思っています。（杉之原）

僕も杉之原のようにチームのため、みんなのために頑張った結果「ラグビーって楽しい」と思えるのは、学びだなと思います。（松岡）



—ラグビーをやっていて、悔しいと思った試合はありますか？

僕は関東新人大会で、早稲田実業に20対17で負けた試合が印象に残っています。この試合は、同点だった終盤にペナルティゴールで勝ち越され、最後のワンプレーで敵陣ゴール前まで攻め込んだものの、トライを取り切れずに終了という試合だったので本当に悔しさが残りました。（杉之原）

—子どもたちに向けて、ラグビーの良さを伝えるとしたらどんなところですか？

ラグビーをやると「ノーサイドの精神」で、試合後は仲良くなります。形式ばった握手だけではなく、ハグをしたり話すことで自然と色々な場所に仲間ができるというのも、ラグビーの良さだと思っています。（杉之原）

ラグビーは、ノーサイドの精神や自己犠牲の精神を身につけるためだけではなく、目の前の楽しみや成長を目標に努力すれば、おのずとその精神が身についてくるスポーツだと思っています。楽しんで仲間と一緒に成長することを目指してプレーしてもらいたいです。（松岡）

ラグビーワールドカップ 2019ではボールパーソン（ボールが外に出た際に予備のボールを選手に手渡したり、ボールを回収する役割）を全会場で高校生が担っています。横浜会場では、慶應義塾高校、桐蔭学園高校、東海大相模高校のラグビー部の高校生が務めています。

この記事は、フリーペーパー「Garden秋号」に掲載されています。

Garden秋号は横浜市営地下鉄やセンター北の商業施設等で配布されています。